

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明 報 恩 感 謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 http://www.higurashi.net/ 第0035号  
護國青年會議 http://www.gokoku.net/ 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成19年3月26日

# 金正日の振り込め詐欺と呆れた金桂冠の逃亡劇



ヒル、グルーザー共同会見

危険された通り六ヶ国協議は金桂冠の逃亡劇で幕を閉じて、またしても肩透かしを食った形となってしまった。ヒルが投じた小便カーブを金桂冠は易々と見逃し押し出しの一点を毛ぎ取り半島へ帰って行った。事態がこのまま推移すれば残るのは莫大な振り込め詐欺の被害だけである。

「やる事が無いから帰国する」そう言い残して二十二日金桂冠は平壤に帰った。その日の午後、釣魚台に雁首揃えた各国の代表は、支那の武大偉を中心に協議の継続が可能かどうか検討していた。

六ヶ国協議の開幕直前、米国のヒル國務次官補はグレーザー財務次官補代理を北京に呼び寄せ、BDA（バンコ・デルタ・アジア）の北朝鮮マネーの全額返還を発表した。



BDA本店内

この措置を聞いて喜んだ金桂冠は、協議初日の基調演説で「BDAが前面解除されれば寧辺の核活動を中断する」と宣言した。韓国代表チョン・ヨンウは「池を覆っていた氷が溶けた」と手放して歓迎している。図に乗った金桂冠は「支援に加わらない日本は、六ヶ国協議に参加する資格がない」と嘯いているが、資格が無いのは北朝鮮の方ではないか。

初日が終了した段階では米朝の思惑通りに展開するかに見えたが協議の流れが突如変わったのは二十日であった。韓国筋の話によると当初金桂冠は「BDAはうまく行きそつだ」と喜んでいたら、ところが金桂冠は協議への参加を拒否して逃亡したのである。北朝鮮の意趣返しとも言

える突然のキャンセルに各国の代表は慌てふためいた。十九日の全額返還会見で閉ざされていた金庫の鍵は開き、金正日はまんまと大金を得ることとなった。この時点で北朝鮮の悲願は達成し、金正日にとつて六ヶ国協議など無意味なものとなり、金桂冠が早々と帰国したのも頷ける話である。しかし北朝鮮の思惑通りシナリオが進んだのは、ここまでであった。

二十二日、BDAの送金先である中国銀行の李頭取は香港で記者会見し、送金が遅れていることについて「我々は上場企業であり、合法的な経営を維持しなければならぬ」と違法な力ネの受取り拒否を宣言した。信じ難いことだが支那人にしては実に真つ当な発言であった。この発言は金正日口座のある金融機関に大きな影響を与えるメッセージとなった。BDA問題は近い内に妥協点を探り決着するだろうが、現段階では経済制裁が完全に解かれたとは言えない状況である。

二月に合意した六十日以内の核施設稼働停止の期限まで三週間足らずとなり北朝鮮の約束不履行が明らかになれば米国防務省の柔軟路線への風当たりが一気に強まって来る。実際に対北朝鮮強硬派のジョセフ前國務次官補は「自分な

らば金正日体制に圧力を掛け続ける（柔軟路線は）支持しない」と痛烈に批判しているが正に同感である。北朝鮮にアメを与えても食い逃げされるだけであり、これまで日本は無駄な支援を続けてきたが全て食い逃げされ、結果的に金正日体制の存続に手を貸しただけであった。

二十二日、麻生外相は「振り込め詐欺のような話になつてはかなわない」と絶妙な比喻を用いてBDA問題への対処について警鐘を鳴らしている。まさしく今回の米朝のやり取りは、金正日の壮大な振り込め詐欺そのものであると言えらるだろう。騙す奴が悪いのは当たり前だが、欺かれることと気づきながら詐欺師の話に乗る者も相当な愚か者であると言える。

冒頭記したように金桂冠は協議の場に着くこともなく、さつさと帰国している。このことから分かるように朝鮮人は正常な脳を持っているとは思えない狂人達である。そんな奴等を相手にした協議などファンタジーにすぎない。北朝鮮のような軍事独裁国家との外交でアメを与えるなど対話など一切不要で、圧力を掛け続けなければならないと心得るべきである。

編集人/戸出蒼流

# 狂乱の追軍売春婦問題と日韓両政府の密約

戦地売春婦問題で安倍総理が「狭義の強制連行の証拠はない」と発言したことで韓国がまた騒いでいる。戦後六十年以上にわたって事なかれ主義で過去の日本の行為に対する批判については一切反論をしない方針で日本政府はやってきた。そのツケがここにきて一気に噴出してきているような感じがさえ覚える。

一九九三年八月五日、ろくな調査もせずに虚言癖のある朝鮮人の元売春婦の証言だけを鵜呑みにして河野談話が発表されたことは、まさに痛恨の極みといえるものである。本来これは官房長官個人の談話であり、政府としての見解ではないはずだが、どういつか諷かいつの間にか政府見解として扱われ現在に至っている。



売国奴・紅の傭兵

問題なのは、この談話が「戦地売春婦の強制連行」に当時の日本政府が関わっていたという完全な虚偽を前提に発表されたことである。そしてその談話を発表したのが希代の売国奴「紅の傭兵」その人である。河野談話を政府見解

とした事が問題をこじらした大きな要因となり現在まで続いている。追いつきをかけるように安倍首相が河野談話を引き継ぐとしたことがさらに問題をこじらせている。やっていないのなら「やってない」と何処までも否定する姿勢を貫けば良いし、強制連行が無かったなら「無い」の一言で済ませれば良い話である。それを首相自ら河野談話を引き継ぐことが内閣の基本姿勢だとしたから、結果として軍の強制性を認めることになってしまったのである。これでは国民を納得させることはできないと断言する。安倍首相の手法は方向性としては賛成するが個々については小手先を取り繕うような策が多く、何となく先行きの不安を禁じ得ない。

昭和四十九年フィリピンのルパン島から帰国した元・帝国陸軍少尉小野田寛郎氏が「私が見た従軍慰安婦の正体」と題する論文を「正論」へ寄稿している。小野田氏は「首相の靖国神社参拝や従軍慰安婦の問題は、全く謂れの無い他国からの言い掛かりであり南京大虐殺と同様多言を弄することもあるまいと感じているのだが、未だに妄言や暴言が後を絶たない馬鹿さ加減に呆れている」と特定アジアの言い掛かりを斬って捨ててい

る。続いて小野田氏は「戦後六十年、大東亜戦争に出征し戦場に生きた者たちが少なくなりつつある現在、私は証言者として、慰安婦は完全なる商行為であったことを後世に書き残そうと考えた」と寄稿の趣旨を述べている。



ルパン島から帰国した小野田寛郎元陸軍少尉

さらに小野田氏は「大東亜戦争時、戦場に慰安婦は確かに存在した。当時は公娼が認められていた時代だったから至極当然である。野戦に出征した兵士でなくても、従軍慰安婦という言葉聞いた者も使った者もない。それは日本を貶めるために後日作った造語であることは明確だ」と述べている。

小野田氏の寄稿は次のような言葉で締め括られている。「従軍慰安婦なるものは断じて存在しない。ただ戦場で春を売る女性とそれを仕切る業者が、軍の弱みに付け込んで利益率のいい仕事をしていただけである。こんなことで謝罪だの賠償だのと騒がれたら被害者はむしろ高い料金を払

った兵士と軍の方である」とまさに正論中の正論である。このひと言に小野田氏の最も言いたかった事が凝縮されている。すなわち従軍慰安婦なるものは端から存在しない、戦場にいたのは追軍売春婦だけだということである。

そもそも戦地売春婦の強制連行なるもの自体が虚偽であり、その証拠など出てくる筈がない。

今や売国政治家、人間の屑とも呼ばれている河野洋平だが当時の河野の行動をみると河野が如何に愚かであったか明らかになる。河野は、世界中で誰も信じようとしなない朝鮮人の言葉を鵜呑みにしたのである。

石原元官房副長官は「日本政府が何らかの形で慰安婦問題を取り上げ謝罪すれば、韓国政府は今後この問題を取り上げない」という密約が日韓両政府の間であったという事を証言している。

はつきり言つて、民族的虚言癖のある朝鮮人の言う事など信じる方がどうかしている。しかしか思えないが、河野はこの密約を信じた大馬鹿者である。

談話というのは法的に政府を縛るものではないが、だからといって軽く扱えるものでもない。政権の連続性を考慮して見直しが行われて来なか

つたのだらうが、政府としても当時の日韓両政府の密約を公にし、強制連行など存在しなかったことをはつきりと断言し河野談話の撤回を行うべきである。政府は客観的事実に基づき「従軍慰安婦は存在しない、いたのは追軍売春婦だけである」と断言すべきである。謂れの無い謝罪は一切行わないという毅然とした態度を示すことこそが「美しい国・日本」への始まりであると信じて止まない。

編集人ノ戸出蒼流

二十世紀前半の日本には国家の存亡を賭けた戦いに殉じた多くの若者達があった。彼等は愛するものを護るため、その尊い命を国に捧げた。最後の瞬間、彼等の脳裏をよぎったものは何だったのだらうか。父母か、妻子か、恋人か或いは子供の頃に遊んだ故郷の山河だったのだらうか。どんなに祖国が恋しかろう。英霊は今も迎えを待っている。南冥の海で、深い密林で、異国の大地で。だが、あの戦争から六十年余が経過しても、その正確な数さえ判明されていない。

合掌